

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18330111

研究課題名 (和文) テレビジョン映像アーカイブ分析と戦後 60 年の記憶に関する研究

研究課題名 (英文) The Analysis of Television Archive, War Films and Human Memory

研究代表者 水島 久光 (MIZUSHIMA HISAMITSU)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：30366075

研究成果の概要：アジア太平洋戦争終結後 60 年を経過して、テレビがこの戦争をどのように記録し、何を現代社会に残そうとしているか—対象番組群の編成、形式、内容的特性の分析を通じ、それらを覆うジャンルの混淆とアーカイブの実現を先取りしたかのような企図を見出した。さらにテレビの将来とアーカイブの不可避の関係を実証すべくドキュメンタリー制作を追体験し、戦時記憶が社会化・歴史化していく過程における、ポスト証言者の時代のメディアの役割を、「アーカイブが媒介する新しい公共圏の形成」という観点から考察するに至った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2007 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2008 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
年度			
年度			
総計	13,500,000	4,050,000	17,550,000

研究分野：メディア論、情報記号論

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：(1) テレビジョン (2) 映像分析 (3) アーカイブ (4) 戦後 60 年
(5) 記憶と記録 (6) 歴史認識 (7) ドキュメンタリー (8) 証言

1. 研究開始当初の背景

毎年 8 月は 15 日の終戦記念日を中心に数多くの戦争関連番組が放送される。2005 年はアジア太平洋戦争終結 60 年にあたり、例年がない規模で制作・OA されたことから、これらを録画し研究用アーカイブを構築した。

2. 研究の目的

テレビが如何にして失われつつある記憶を保存し、また新たなメッセージとして社会に問いかける力を持つか、また我々が歴史を考える際のツールになりうるかを検証する。

3. 研究の方法

(1) メディアと戦争に関する先行研究、記号

論、技術哲学、社会学的等の関連文献の渉猟。
(2) 録画した番組群を素材に、記号論的手法を用いて、編成、形式、内容的特性を分析する。
(3) 番組制作者の意図を、インタビュー、文献等によって明らかにする。
(4) 放送アーカイブの社会的意義と、構築する際の技術・制度的要件を考える。
(5) 実際にドキュメンタリーを制作し、(1)-(4) で提起された問題を実践的に検証する。

4. 研究成果

(1) 理論フレーム (文献研究)

従来は異領域とされてきた分野の研究を以下の 4 つの観点から渉猟し、そこから本研究に参照すべき理論枠組を構想した。

① 現代史問題としての戦争と記憶

2005年には、番組だけでなく本テーマに隣接する多くの研究が出版された。佐藤卓巳『八月十五日の神話』(ちくま新書)、坪井秀人『戦争の記憶をさかのぼる』(ちくま新書)、米山リサ『広島—記憶のポリティクス』(岩波書店)、桜井均『テレビは戦争をどう描いてきたか』。これらはいずれも60年後から振り返った時に現れる「記憶の構築性」を主題としている。メディアや記念碑(monument)はその技術的側面を支えている。こうした主題は直前に邦訳されたイアン・ブルマ『戦争の記憶—日本人とドイツ人』(1994=2003、ちくま文庫)、マリタ・スターケン『アメリカという記憶』(1997=2004、未来社)、ブルース・カミングス『戦争とテレビ』(1992=2004、みすず書房)などにも共有されている。これらは戦後60年が、記憶の生成という問題において重要な地点であることを示し、「証言者の存在」と「アーカイブ化された記録」の接続という課題を焦点化させた。

② テレビ分析の方法としての記号論

連携研究者である石田英敬は、本研究前半の成果物として企画した『テレビジョン解体』の巻頭論文「テレビ記号論とは何か」において、テレビが現代人の「記号の生活(ソシユール)」に最も大きな影響を与えているのみならず、その記号作用は、『記号論』の成立条件自体を全面的に問い直す作業を含む、新たな認識論的パラダイムの探求を促すものと位置づけた。この認識に基づき、本研究では三つの次元で具体的に現代記号論の知見を分析に援用するとともに、その再考に取り組んだ。(→2-(2)個別番組分析に適用)

a) 映像の内的構造；クリスチャン・メッツによって提起された映像の離散的単位としての「大連辞類型」をテレビジョン映像に適用し、映像の内的構造の把握から記憶の問題系へのアプローチの道筋を明らかにする。

b) ジャンル論；フランソワ・ジョストの概念「ジャンルの約束」を手掛かりに番組群のカテゴライズを行う外延的枠組みを再考し、その現代的問題としての「ジャンルの混淆状況」を捉える。

c) 認識論的変節を捉える；ウンベルト・エーコが1983年に著した「失われた透明性」(→5；図書4『窓あるいは鏡』に翻訳収録)の中心概念「パレオTV/ネオTV」を手掛かりに、映しだされる対象とその発話の人称性に注目し、視聴者の現実空間との連続性を問う。

③ 人間の記憶とメディアの関係を問う

テレビドキュメンタリーは「いま・ここ」を生産するテレビの機能に従い、「現在」に「過去」を召還する仕事を行っている。しか

し、今日のネオTV的状况では、その「現在」の磁場が強すぎ、記憶の消去が広がっている。

この現象は、ポール・リクールが『記憶・歴史・忘却』(2000=2004,新曜社)において言う「書かれた歴史にメディアが媒介する集合的記憶が取って代わる時に、忘却と許しが等値される」構図に当てはめることができる。またそのメカニズムはベルナル・スティグレルの技術哲学(『象徴の貧困』(2004一部邦訳2006,新評論)、『技術と時間』1994-2003未邦訳)が示した第三次過去把持装置としてのテレビの機能、さらにそれによる産業的共時化の動向に沿って理解することができる。

④ 今日のテレビの社会的位置を考察する

本研究では、今日の戦争に関わるテレビ番組群が既に潜在的にアーカイブを構築していることに注目し、それを新しい「公共圏」を構築する際の核心に位置づける。そのために、フーコー、デリダなどの広義の「アーカイブ」概念に立ち返り、またアナル学派を参照しつつ発展した図書館情報学系の「アーカイブ学」の動向を踏まえ、ハーバーマスの「公共性」論(『公共性の構造転換』)との接続を図る。この理論の啓蒙的、言語中心主義的な限界は、公共圏をバイオ・ポリティカルな生態系として捉え返すことによって乗り越えられる可能性をもつ。ここでは代表研究者による「メディアと公共性の原理の現在—パブリック・システムとしての放送を再考する」(『マス・コミュニケーション研究』65,2004)の議論の発展を試みた(→5；図書3)。

⑤ 上記アプローチの総合

文献研究を通じて得られた知見は、以下のマトリックスに集約することができる。

	日常世界	メディア	アーカイブ
認識可能性	印象	客観化	参照
伝達可能性	共有	媒介	再生産
記録可能性	伝承	保存	集積

(破線は、問題が生じるポイント)

「戦争」は基本的に「(認識しえない)死」とその「非日常性の日常化」という二重の理不尽さに苛まれる経験である。統制された集団に埋めこまれた個人的経験や印象は、それを主体的に「語る」ことによる共有(=記憶の生成)~社会化を妨げる。戦後テレビが戦争を扱うことは、こうした損なわれた過程に対する「介入」であると位置づけられる。

しかし証言者が数少なくなった戦後60年はこうしたメディアによる記憶の歴史化のタイムリミットであるともいえる。さらにデジタル技術がアーカイブ環境の実現を可能にしつつある今日の状況を踏まえると、その「介入」の在り方は今後大きく変わらねばならない——これが以降の番組分析および実践研究を支える視座である。

(2)録画した番組の分析

①編成分析

2005年8月に録画した番組は地上波衛星（ハイビジョン除く）計110。そのうち不完全な録画、重複（期間内再放送）などを除いた分析対象は78番組である。うちNHKは54、地上波だけで（総合、教育）だけで33番組にのぼる。これらの番組群は9日（長崎原爆）15日（終戦）の二つのメモリアル・デーを境に三つのブロックに編成されている。

a) 主題の変化

9日までの主題はもっぱら「原爆」である。9日から15日の間になると、原爆に内包されていた問題が「都市爆撃」「核と現代の戦争」へと分化し、「前線・外地の状況」から対アジア、戦後処理問題へと展開していく。ここには“過去から現在へ”“内から外へ”“被害から加害へ”の三つのベクトルに沿った主題の展開がみられる。注目すべきは15日以降である。ベクトルは更に「終戦から戦後（昭和のイメージ）へ」「戦争問題の普遍化」「検証・秘話の発掘～寓話化」に拡張する。

このブロックの展開は桜井が『テレビは戦争をどう描いてきたか』で論じたテレビドキュメンタリーの戦後史そのものであり、「モノログからポリログ、そしてさらなる閉塞へ」という50年に亘る流れをまるで一か月で追体験するかのようである。この「戦争」表象の集積体は、まさしくテレビが「介入」してきた戦争の想起の再生産＝歴史化が企図され、作られたものと言える。

b) ジャンルの多様性

これらの番組は大半がドキュメンタリーに分類されるが、それだけではない。特に民放の特番においてはドラマやバラエティの一形態としての情報ワイドが目立つ。このジャンルの多様性の中にも、テレビが過去と現在を結びつけるパターンが見出される。

i <再現> 現在を消し、超越的な位置から、過去を再構成する。

ii <検証> 現在の位置から、過去の経緯、妥当性、因果性を問い、評価する。

iii <想起> 個人の記憶のレベルで思い出し、語る。記録映像は妥当性の保証。

iv <参照> 常に主題は現在を定位する。記録映像はその「現在」に意味を付与する。

<再現>は主にドラマの形式を要求する。<検証>は資料映像、<想起>はインタビューを必要とする。それに対し<参照>は現在のルポ映像が前景化する。番組は、こうした過去と現在の関係性を組み合わせて構成される。ひとつの番組内に多様な要素が織り込まれればそれはバラエティ的になる。

c) NHK スペシャル

この一か月の編成の中で「NHK スペシャル」は特筆すべき対象である。通常は日曜21時を中心に（シリーズ企画などは他の曜日にも）放送してきたが、この年の8月は6日から14日まで連続9日間「戦争」を題材に異なるテーマの番組を放送しつづけた。

NHK スペシャルの基本形式はドキュメンタリーである（12日の『象列車がやってきた』はドラマ）。しかしその構成手法は極めて多様である。この多様さの中にこそ、はめ込まれた象徴的な「戦争」の映像の反復が生きてくるのである。例えば、特定の意味との関係をもったスチール、効果音の使い方など。これらは番組を横断するパターンを形成している。こうした象徴映像は記念碑的な「隠蔽記憶」（リアルな経験の想起に蓋をする；フロイト）の機能を担い、ある種の音は「沈黙を作り出す」。NHK スペシャルは、戦争の象徴性を生産する役割を果たしているのである。

d) 2006年以降の展開

戦争関連番組は2005年以降も、数の上では及ばないが、「60年」を契機に提起された問いを継承していくことになる。特に9日と15日を境とした編成はより明確になり、2007年までの三年間に亘って、NHKは13～15日に「終戦と戦後処理」をテーマにした特別編成枠を設けた（→②個別番組『靖国神社』ほか）。

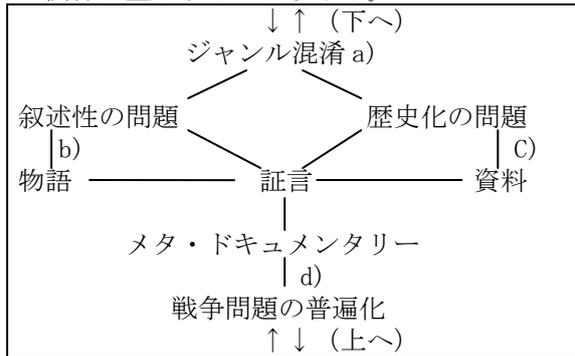
また切実な問題として浮上した「証言者がいなくなる」危機感には更に煽られ、2007年にはWebサイトと連動し戦争関連番組を一覧可能にした「Sengo62」と、「証言記録」のプロジェクトが進んだ。こうした動きは2005年以前には、10年刻みのメモリアル・イヤーにおいても全く見られなかったことであり、「60年」の戦争関連番組の大量生産は、様々な面から番組のアーカイブ化を促す契機になったといえる。

しかし2008年は、北京オリンピックと重なり、一転8月の戦争番組中心の編成は崩れる。その一方で8月以外での戦争関連番組のOAが増え、テレビと戦争の向き合い方はまた大きく変化を始めた。振り返れば2005～2007年の三年間はアジア太平洋戦争を、証言を通じて描く最後のチャンスであったと言える。

②個別番組分析と主題連関

78番組を個別に分析するにあたって、その起点に『ヒロシマ』（TBS, 2005/8/5）を置いた。テレビ番組が映画などと最も異なる点は、一つの作品として閉じておらず、他の番組との潜在的なネットワークに開かれていることにある。特に『ヒロシマ』は、その中に多様なジャンルを内包しているだけでなく、他の番組との間に数多くの参照関係を結んでいる。そのリンクこそが、個別番組の分析テーマを指し示している。主なテーマとその相

互関係を整理するとこうなる。



ドキュメンタリーとは、問題を普遍的な位置から論じようとする誘惑と一回的な現実との間で常に揺れ動く形式である。2005～07年の番組群はいずれも、ドラマや情報ワイドを含め、その意味で記録と視聴者の記憶を結ぶ解釈項の位置を、この構図連関の中にプロットすることができるが、本報告書では紙幅の関係から、中でも特別な意味をもつ4つの番組の個別分析結果を簡潔に述べるに止める。

a) 『ヒロシマ』；ドキュメンタリーのネオTV化について

制作者たちはこの番組を「ドキュメンタリー」と明言しているが、その形式は多様な表現要素で構成されたバラエティに他ならない。そのジャンル混淆の核に「現地に立つ」シーンが据えられている。このことによって証言も具体的な「いま」に楔止めされ、MCも視聴者の日常と現地をつなぐ対話者となる。ここに貫かれている「語り」の前景化あるいは指標性は、まさしくネオTVの特徴をなすものである。

その一方で、この形式の中で伝達を企図された一定の解釈は、多様な要素・表現手法が招き入れた偶然性に晒され自壊する（特に最終場面「ハロルド・アグニューとの対話」）。またこれまで放送されてきた原爆に関する他の数多くの番組を、明示的あるいは暗示的に参照ながら叙述する手法は、アーカイブ型の番組制作・番組視聴の将来的な在り方を示唆するものである。

b) 『赤い背中』(2005/8/9)；語ることの主題化と象徴性

ドキュメンタリーはバラエティだけでなくドラマとも混淆、あるいは接続する。それは『ヒロシマ』が再現ドラマを内包し、その多くをBBC/ZDF制作の『Hiroshima』から引用していることから、またTBSがドラマ『広島』を編成の対極の位置(8/29)においたことにも表れている。

『赤い背中』は、『ヒロシマ』と比較すれば極めて古典的なドキュメンタリーに見える。しかしこれにも実は『ヒロシマ』

同様、主人公谷口稜暉の「いま」が中心となった指標的な配置に支えられ、また過剰なまでの反復構造と昔話的叙述に貫かれている。こうした作りは「語り」自体が三重に（語られる対象としての谷口氏、その谷口氏の語り、そして語ることの重要性をメタな位置から語ること）主題化されていることを表している。ここにバラエティ化とは異なる次元でのジャンル混淆のかたちを見ることができる。

c) 『靖国神社』(2005/8/13)；歴史問題のアジェンダ設定

13～15日に設定された「終戦と戦後処理」をテーマにした三年間にわたる特別編成では、「語り」の強調は一旦後景に退き、ドキュメンタリーは、後日別の番組に設けられる「議論の場」(『靖国問題を考える』(8/14)、『日本のこれから—戦後60年じっくり話そう アジアの中の日本』)の、素材提供とアジェンダ設定の役割を担う。

『靖国神社—占領下の知られざる攻防』、『日中戦争—なぜ戦争は拡大したのか』(2006/8/13)、『A級戦犯は何を語ったのか—東京裁判・尋問調書より』(2007/8/13)の三年間同日に配置された番組に共通する主題は「知られざる攻防」である。それらは内容的のみならず形式的にも（特に2005年の「靖国」は）シンメトリーが貫かれそれによって対立項が明示される。そしてその対立に「書かれた記録」VS「声（あるいは証言）」が交差する。こうした構造の中で、本来は象徴性を担保する「記録」や「証言」がやはり、「いま」を基点に「あの時」を指し示す指標記号として機能していることに気づく。つまりこの三日間×三年間の特別編成は、過去の声と史料を、「いま」に軸足を置いた討論に奉仕させるための、放送を用いた「コミュニケーション・デザイン」の試みであったといえる。

d) 『ZONE・核と人間』(2005/8/7)；メタ・ドキュメンタリーの出現

『靖国神社』を起点とするデザインは、アーカイブの存在を前提としている。アーカイブを広義に“文化を統御するシステム”として理解するならば、それは単に「記録」が集積するだけでは機能しない。記録が繰り返し活用されることによって生じるメタな眼差しがそこには必要なのだ。

『ZONE・核と人間』は、それを直接的に提示する実験的番組であったといえる。この番組には5つの注目すべき特徴がある。

- i 「資料」素材の前景化、徹底的な過去の映像からの引用。
- ii 「素材」の結合関係による意味の創出。
- iii その意味は提示された「ZONE」という語

の未規定性、空虚さを埋める。
 iv 明示されないリニアな構造（中盤で折り返される時間的にシンメトリックな構造—ZONEの生成→ZONEの現在）
 v 埋め込まれる象徴性

これらの特徴は、この番組がこの年の他のドキュメンタリーのネガ的表象であることを示している。現在を起点にせず、現在の位置が番組を介して定位され、また象徴的な要素は、物語をなすのではなく散文あるいは詩的に配置されている。この番組は、この年に企画された『平和アーカイブス』に対してもその対極の位置に立つ。

他にも海外のドキュメンタリーを題材にした「戦争問題の普遍化」や、「証言」の取り扱いを主題とした映像分析の発展を試みた（連携研究者の原宏之が中心→5; 図書2）。またこれらの分析は、2007年までの通時あるいは共時的分析としても敷衍可能である。

(3) 番組制作者の意識

本研究の初期に、NHKの川原浩和、桜井均等にインタビューを行った。「ドキュメンタリーの難しさは、限られた時間の中で、いかに多くの情報量を視聴者に叩き込めるか」（川原）、「テレビドキュメンタリーは不透明で大容量の“異物”である」（桜井）—この意識の違いには、ドキュメンタリーの過去と現在の位相差が表れている。しかし一方で桜井は、「ドキュメンタリーは認識のツール」になりうると言う。桜井が『ZONE』を制作する際に考えたのは、そうした未来に向けた投企だったのではないだろうか。そう考えるとそれを支える機能としてアーカイブは、極めて重要な存在に位置づけられる。

(4) アーカイブの機能とその諸相について

連携研究者の小林直毅は、本研究の問題意識を発展させ、自身が理事・部会長を務める日本マス・コミュニケーション学会理論研究部会で、2008年度の一年間「アーカイブ」を主題とした連続研究会を開催した。この研究会は「アーカイブ」の社会的機能を支える理論的背景の整理と、「放送」と「アーカイブ」の関係をめぐる動きの捕捉を続け、その成果は2009年度の学会誌特集に発表される。

その中で代表研究者は、文献研究(1)–③をベースに理論を整理する一方で、本研究における個別目的（この場合は研究目的の私的）アーカイブの構築に並行して、NHKアーカイブス及び地域や諸団体による中間組織が運営するアーカイブ・プロジェクトの諸相をリサーチし、それらのダイナミックな関係の構築とそれを支える4つの技術的要件—
 i 放送—アーカイブ間の双方向回路、ii メタデータの階層化、iii 参照関係の可視化、iv 接

触的・集团的視聴支援—について提言を発してしてきた（→5 学会発表）。

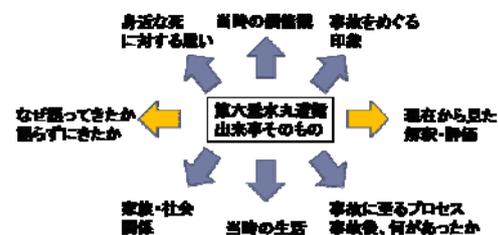
(5) ドキュメンタリー制作による実践的検証
 本研究の最終年、これまで行ってきた「文献研究」「番組分析」「インタビュー」「アーカイブ研究」の成果—テレビとアーカイブとの接続の不可避性をさらに実証するために、「物語」「証言」「資料」という歴史を構成する素材を実際に発掘し、ドキュメンタリー映像作品を制作する実践を行った。

題材は昭和19年2月に鹿児島（錦江湾）で起こった「第六垂水丸遭難事件」。466人の死者行方不明者を数えたとされる戦時下の海難事故である。これまで戦後メディアにほとんど描かれることがなく、地元の人々にとっても「失われた戦時記憶」となっていたこの出来事を対象に i ドキュメンタリーにおける「証言」の位置、ii 「ナショナル」化されない地域の記憶の「想起」「伝承」をテーマにインタビュー調査と資料収集を行い、それを素材に「現地上映版」映像を作成した。

この研究は以の点で、これまでのテレビドキュメンタリー分析の作業とは対照をなす。

- 昭和19年2月という時期、鹿児島県大隅という地域への注目；これまでテレビが扱ってきた特権的な戦時記憶との対照。
- 銃後の生活（戦時の日常）と死の非日常性との関係への注目。
- メディアを介さない口承的な記憶の生成過程への注目；この出来事がなぜ一部の関係者以外に伝承されてこなかったか。
- 現地上映版—「記憶の保持者に、編集された記憶＝記録を返す」行為を、マス・メディア的回路の対極に位置づける。

2007年6月以降事前調査に入り、2008年3月から4回にわたって計20人（遭難者、遭難者の家族、郷土史家、その他関係者）のインタビューを収録した。その方法もテレビ的「証言」を批判的に検証すべく、話者に長く自由に語ってもらうオーラルヒストリー調査の手法を用い、カメラ・マイクの圧迫を抑えた（図はインタビューの内容分析より）。



インタビューの結果、我々の戦時史の常識を覆す事柄がいくつか浮かび上がった。

i 「昭和19年2月の大隅」の人々の「切迫感のない高揚」という意識状況が確認できた。また人々にとってもこの事故を除いてこの時期の状況はほとんど正確に記憶されていなかった（この事故の記憶のみ鮮明）。

ii それだけにいきなり直面する極限状態の衝撃は心理的に甚大な影響を与え、それが糖当事者たちの口を封じる直接の原因となった（士気低下を恐れた言論統制はここでは明確な形では認められなかった。むしろこの事故を当局は士気高揚に利用した）。

iii 我々の調査活動を通じて、地域の人々の中にこの出来事を再想起し、伝承する機運が生まれた。遺族会の発足、慰霊碑の建立、様々な勉強会が開催され、地元メディアがそれを追うという、「語る」ことから「歴史」が生成されるプロセスが現実に出現した。

冷静に総括するならばこの実践研究は、「人々の素朴な善意が、暴力と凶行を受け入れる素地を作り出すというパラドックス」を露わにしたともいえる。戦時記憶の語りにくさとは、まさにその複雑さに根ざした問題である。メッセージの単純化を指向するテレビは、残念ながら今のところこの点に迫ることができていない。とするならばそのカウンター的位置に、例えば地域の記憶を語る生の声がアーカイブされる意義は大きいと考える。

(6) 本研究の結論

戦後 60 年という時間の経過とともに、放送の機能は「空間媒介」的なものから、歴史の生成に関与する「時間媒介」的な役割を強く要求されるようになっていく。それはこれまでの放送が作り出してきたナショナルな記憶とは異なる多様な歴史記述の可能性を担保しなくてはならない。デジタル時代のテレビの核心を担うものとしてアーカイブを論じる意味はここにある。

実際の映像アーカイブの設計においては、テレビ番組群が表象のネットワークを成すことに注目し、そのジャンルの混淆形態を利用して解釈の階層性を視聴者との間で共有することが肝要であろう。それによって日常生活の個人的経験（心的印象）と公共空間の間を「表現」は往還し、社会化は媒介される。このようなコミュニケーション・デザインが施されたテレビを見る経験こそが、アーカイブによって開かれねばならないのだ。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①水島久光、「桜井均著『テレビは戦争をどう描いてきたか映像と記憶のアーカイブス—』」, 東京大学大学院情報学環紀要（書評、査読無）, No. 70, 2006, 185-186

〔学会発表〕（計 7 件）

①石田英敬, 「テレビの記号論とは何か」, 日本記号学会, 2006. 5. 13, 東京大学

②水島久光, 原宏之他「テレビコンテンツ研究の最前線」, 日本記号学会, 2006. 5. 13, 東京大学

③石田英敬, 水島久光, 西兼志他「記憶と記録

／ドキュメンタリーとテレビ的情報空間」, 日本記号学会, 2006. 5. 14, 東京大学

④石田英敬, 小林直毅他「日仏テレビ分析の最前線」, 日仏会館シンポジウム, 2006. 5. 15, 日仏会館

⑤水島久光「アーカイブスの現状と課題を考える—世界の映像アーカイブスの実情から」, 日本マス・コミュニケーション学会, 2007. 10. 27, 日本大学

⑥水島久光「戦後 60 年の記憶と記録—テレビは今、戦争をどのように描いているか」, 鹿児島大学現代社会学会, 2007. 11. 28, 鹿児島国際大学

⑦水島久光「放送アーカイブの理論的構図を考える—アーカイブ研究の視座とその史相」, 日本マス・コミュニケーション学会, 2008. 6. 8, 中京大学

〔図書〕（計 4 件）

①日本記号学会（水島久光編）, 慶應大学出版会『新記号論叢書セミオトポス 4 テレビジョン解体』2007, 237 頁

②原宏之, 慶應大学出版会『表象メディア論講義. 正義篇』2008, 344 頁

③水島久光, せりか書房『テレビジョン・クライシス—視聴率・デジタル化・公共圏』2008, 287 頁

④水島久光・西兼志, 慶應大学出版会『窓あるいは鏡—ネオTV的日常生活批判』2008, 393 頁

〔その他〕（DVD 制作 1 件）

①水島久光, 五嶋正治『冬の波—第六垂水丸遭難とおおすみの記憶』56 分, 非売品

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水島 久光 (MIZUSHIMA HISAMITSU)

東海大学・文学部・教授

研究者番号: 30366075

(2) 研究分担者

五嶋 正治 (GOTO MASAHARU)

東海大学・文学部・准教授

研究者番号: 40439683

(3) 連携研究者

石田 英敬 (ISHIDA HIDETAKA)

東京大学・大学院・情報学環・教授

研究者番号: 70212892

吉見 俊哉 (YOSHIMI SHUNYA)

東京大学・大学院・情報学環・教授

研究者番号: 40201040

小林 直毅 (KOBAYASHI NAOKI)

法政大学・社会学部・教授

研究者番号: 10249675

原 宏之 (HARA HIROYUKI)

明治学院大学・教養教育センター・准教授

研究者番号: 30350276

以上